組織行動研究

No. 6

編集後記にかえて

●〝新入社員，生かすも殺すも上役次第〟という，いささかセンセーショナルな見出しで，日経新聞が，わたしたちの研究（結果の一部）を記事にとりあげた。それからというもの，わたしたち（若林・南・佐野の三人）は，とんだ〝春の嵐〟に見舞われつづけねばならなかった。「結果を詳しくおしえて欲しい」「新入社員の研修に使いたいと思うので」などなど，電話がひっきりなしの毎日が一ケ月あまりもつづいたのである。いずれにしても研究報告書を読んでいただくのが一番なので，最初はわたしたち自身，そういう応答を電話口でくりかえしていた。（がそのうち，いい加減閉口して，わたしたちが電話口に出なくなったことの結果として），わたしたちの家族（とくに女房たち）が，そして，慶応義塾大学産業研究所の事務室のかたがたが，この〝嵐〟にまき込まれていった。電話はたしかに便利な機械である。だが，その便利さを一方的に利用する場合，それは，大げさにいえば，〝凶器〟にもなりうることを実感させられた一ケ月ではあった。

●こんな騒ぎとはうらはらに，わたしたちの研究そのものは，どちらかといえば，〝基礎研究〟の部類に属するものである。この故に，たとえば〝研修に役立てたい〟など実務的な観点から本モノグラフを読まれるむきには，〝なんだい，これは〟といった感想のみが残るかもしれない。しかし，基礎研究のなんたるかを，わたしたちは，企業現場のかたがたに理解していただきたいと思う。ごくあたりまえな日常現象の背後にひそむメカニズムを把握しえてはじめて，応用技術や具体的な施策を意味をもって問いうるのだということを，いますこし余裕をもって受けとめて欲しいと願う。事情はことなっているというにせよ，産業社会心理学や組織心理学上の重要な知見――たとえば，ホーソン効果やアセスメント・センター方式や職務充実など――が，大学の象牙の塔からの思いつきによってではなく組織現場の人いきれのなかで積みあげられているアメリカの状況を，うらやましいとみるのは，わたしたちだけだろうか。

●本モノグラフは，大学を卒業して企業に職を得た成人男子が，当該組織で三年目を迎えるまでの〝ドキュメンタリー・フィルム〟と考えていただけばよいかと思う。わたしたちは，かれらの軌跡（組織における初期経歴の発達）を正確にフィルムに収めるべくひたすら努力を傾けた。フィルムは，まだまだ現象したての〝ラッシュ〟というべき段階であるが，鑑賞にたえるぎりぎりの線での〝編集〟は施したつもりである。フィルムそのものの評価はいろいろであるとしても……。　（南　隆男）

慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班モノグラフ
組織行動研究（第6号）
編集　佐野勝男・南　隆男

KEIO STUDIES ON ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND HUMAN PERFORMANCE No. 6
MARCH 1980

発行　〒108 東京都港区三田2―15―45
慶應義塾大学産業研究所
電話（453）―5640（直通）
＜昭和55年3月29日＞

印刷　〒104 東京都中央区八丁堀3―21―4
株式会社国際印刷
電話（551）―3930（代表）
＜昭和55年3月22日＞